令和５年度 第２回
市民と議会の懇談会概要

令和６年１～２月開催

宮　津　市　議　会

「市民と議会の懇談会」　概　要

開　催　日　時	令和６年２月１６日（金）　午後３時００分～４時２０分
開　催　場　所	宮津市役所　委員会室
相手方（人数）	宮津の魅力情報を発信している方（３人）
担　　当	総務文教委員会

【議会報告内容】
・所管事務調査議会活動

テーマ【映像を活用した取り組みについて】

【意見交換・提案等】

効果的な発信方法について

・若者は公式の SNS より友達や個人のアカウント、口コミなどで情報を取得する方が多い。
・複数のインフルエンサーがいると効果的
・発信力のあるインスタグラマーの起用。「宿泊する」「食べる」といった体験込みで発信してもらうことも良い。
・視覚的な発信として、都市部の人が集まる施設でデジタルサイネージなどを活用することにより、多くの人に見てもらえる。
・アルゴリズムの視点も考慮する。
・Instagram（インスタグラム）＝ハッシュタグではなく、文章中のキーワードや写真を AI が判断しお勧め投稿が上がってくる。
・全国美しい景色がある中で、来訪し、移住につなげるための差別化要素の取り入れが必要である。
・現地でしか体験できないものが効果的。（例えば橋立×VR で龍が見れる体験等）

意識する点

・「誰に向けて、何のための情報発信か」の目的意識が最重要である。
・デジタルをきっかけに、どうつながるか。（最終的に宮津市に訪れてもらうこと。）
・映像（視覚）×〇〇（五感）　…漁師の営みや祭の温度感など、映像との掛け合わせ
・文章で伝えるべきものと、映像で伝えるものの精査が必要である。
・宮津や丹後は、近畿県内でしか知られていない。宮津市内での暮らしを楽しんでいる人がいることを、どのように外へ伝えるか。

課題

・宮津市のビジョンが抽象的で市民に分かりにくい。（良い例：日本一の公教育を目指す町：安平町）
・市の担当職員が人事異動することで広報内容や発信方法に統一感がない。

良い点

・地元高校生の空き家 DIY や、大学生との耕作放棄地ワークショップ等、学生が学んだことを語りながら映像に残す内容は好評であった。

・共創型の映像づくりは、作る過程で地域の魅力を再発見したり、地域外の方との関わり等も楽しかったとの声があった。プロセスが大切。

・市の X(Twitter)や Instagram は好印象。

・今の若者は宮津市が大好きな子が多い。

まとめ

情報発信したい層や発信することで得たい効果等について、表面的な言葉でなく、しっかりとした具体的な目的意識をもって設定することの重要性を改めて感じた。

一方で、新しい手段ばかり取り入れるだけではいけない。今あるもの(広報誌等)をしっかり整える視点も必要。

キャッチコピーを作るにしても、流行りで終わらせるのか。ずっと使い続けたいワードなのか。大切にしたい視点は何かを考えて作成すること。

文章で表現された想いを見ることで感動することもある。四季や風景、地域で頑張る人やプレイヤーに焦点を当てて情報発信することも良いが、市民や移住予定者が必要とする情報、欲しい情報は何なのか、日常の暮らしにスポットを当てることでその情報に結びつくことも。

市民と議会の懇談会の概要を報告します。

令和６年３月 27 日

宮津市議会議長　　長 本　義 浩　様

総務文教委員会　副委員長　堀　未季

「市民と議会の懇談会」　概 要

開　催　日　時	令和６年１月１６日（火）　午前１０時３０分～１２時００分
開　催　場　所	宮津市防災拠点施設
相手方（人数）	宮津市認定農業者協議会新規就農者　４人
担　　当	産業建設福祉委員会　７人

【主な意見・要望･提言等】

≪テーマ≫

〇持続可能な農業の確立に向けて

　農業従事者の高齢化と後継者不足に加え、鳥獣被害や農業生産物価格の低迷などにより、耕作放棄地も増え非常に厳しい状況にある。

　農業が次世代へ引き継がれるよう、経営の安定化や担い手の育成のほか、地域農業の各課題の解決に向けた効果的な取り組みの調査研究を行う。

≪意見交換など≫

①疑問にぶち当たったときに相談するのはどうしているのか。

D：振興局に相談したが明快な回答をいただけなかった。静岡県に技術指導者がいるので、そこへ研修に参加し学んでいる。

A：養蜂は祖母や母に相談して、補助制度については市や府に相談している。農業委員会の相談会（若手農業者の集い）で疑問等を話したりする。若手と高齢層の溝や市内での販売競合もあるが、市外への販路など都会へ向けての視野も大切。

B：レモンは、技術的に相談するところがない。より単価を上げるために、他の人がやっていないこだわりも求めながらやっていく。

②担い手を育成するためにはどのような支援が必要か。

C：インターンシップに関心がある。滞在して農業体験することが大切。そういった支援策を。

B：一律の支援ではなく、オーダーメイドでも可能な制度を市に提案したい。

③安定した経営を行うために何が必要か。

・ 販路を宮津市の外へ求めていくこと。宮津のブランド（ストーリー性を持った宮津のギフトセット）として都市部に売り込んでいくこと。個々人での難しさを解消する方法として、宮津の送り詰めセット（海産、農産など）で季節ごとに変えていくなど（ふるさと納税返礼品活用等）。

・ 観光客が宮津に来てどんな土産を買えばよいか、のぼりの掲出等はっきり解るように広報強化。

・ 消費者は無農薬作物（オーガニック）を求めていることを頭に入れながら、付加価値を高める生産物を。

④その他

・ブランディングに関して相談するところがない。写真の撮り方、宣伝の方法など教えてほしい。

・耕作放棄地を開墾し、オリーブ畑にするには重機が必要である。補助金があるかどうか相談したが「汎用性があるものには補助はできない」との回答。何か方法がないものか。

・吉津小５年生がコメ作り体験学習を行った。職場体験として中学２年生が収穫体験をしている。これらは担い手確保に大切な体験だ。

・中学生や高校生が農業をかっこいい職業と思うように、アプローチが必要ではないか。何かそういう機会をつくっていくことも大切。

・地域農業の提案をしたいが、どういう手順で行動すればよいか。

（議員発言：議論の余地もあり相談も可能。）

≪まとめ≫

今回の出席者は、いずれも親族が宮津にいて就農しており、就農するきっかけは、地域や地域に住む先輩の信頼度も影響している。

宮津には素晴らしい自然環境があり、その中で仕事ができることの価値観は、宮津での就農者が増えていく可能性を示唆し、若い人の将来に向けての考え方として、環境にやさしい農業で付加価値を高め、市場を市外にも広げていくという方向性が語られた。

行政として何ができるのかを深めていく必要がある。

市民と議会の懇談会の概要を報告します。

令和６年３月 27 日

宮津市議会議長　長 本　義 浩　様

産業建設福祉委員会　委員長　河 原　末 彦

「市民と議会の懇談会」　概 要

開　催　日　時	令和６年１月１６日（火）　午後１時３０分～３時００分
開　催　場　所	宮津市防災拠点施設
相手方（人数）	宮津市認定農業者協議会認定就農者　１０人
担　　当	産業建設福祉委員会　７人

【主な意見・要望･提言等】

≪テーマ≫

〇持続可能な農業の確立に向けて

農業従事者の高齢化と後継者不足に加え、鳥獣被害や農業生産物価格の低迷などにより耕作放棄地も増え、非常に厳しい状況にある。

農業が次世代へ引き継がれるよう、経営の安定化や担い手の育成のほか、地域農業の各課題の解決に向けた効果的な取り組みの調査研究を行う。

≪意見交換など≫

日頃から感じておられる農業振興施策について

・農業をやめる人が多い。一人に集中すれば負担増となる。特に、草刈りが大変。
・世代交代がなかなかできない。人手不足が深刻な問題。
・獣害。特に最近ではシカが多くなってきた。フェンスを高くするのに人手がいる。
　また、秋には熊が民家の近くに出没するなど、以前とは様子が変わってきた。
・里山が疲弊している。獣害の駆除と防除の施策推進を。
・獣害対策をしっかりしないと、家庭菜園もできない。獣害対策専門の職員配置を願う。
・インボイス制度導入は、小規模農家にとっては対応が苦しい。
・就農者を確保しようと「イベント」を開催するが、ニーズに合う施策となっていない。そもそも、ニーズを拾い上げる場がない。各地域に沿った施策・対策が必要。
　世屋地区は、ライト層を求めていない。ただ 1 日、2 日の交流だけでなく、1 か月以上は移住体験しなければ、定住には結び付かない。
・ニーズに合っていない農機具を補助金で導入している。その前にニーズ調査が必要。補助制度のメニューと現場の条件が合わない。小規模耕作地が多い宮津市にあった機械導入を考えるべきである。
・スマート農業は、小規模耕作地の多い宮津市には合わない。
・米を作ってきたが、価格低迷と肥料や農薬など農業資材の高騰で厳しい状況である。
・儲かる農業となるためには、地産地消を進め、付加価値を高めること。宮津市では、観光業と農業を結びつけて支援をしていただきたい。
・宮津では、油粕の肥料を使った特別栽培米「つやっ娘米」を 15 名のグループで作っている。野菜も付加価値を高める努力をしているため、今後、貯蔵施設も必要になってくるのではないか。
・行政には、小さな特産農家を見守る施策もお願いしたい。

≪まとめ≫

人手不足である農家の現状は、大変深刻な問題であり、その中でも有害鳥獣対策は、離農していく人を引き留めることにもつながるため、徹底した対策が必要である。

また、補助制度の導入については、地元にとって必要とされるものが国の基準と、かい離している現状から、地域のニーズを把握した上で宮津市単独の補助制度構築を考えていく必要がある。

市民と議会の懇談会の概要を報告します。

令和６年３月 27 日

宮津市議会議長　長 本　義 浩　様

産業建設福祉委員会　委員長　河 原　末 彦

「市民と議会の懇談会」　概　要

開　催　日　時	令和６年２月６日（火）　午後１０時３０分～１２時００分
開　催　場　所	宮津市防災拠点施設
相手方（人数）	宮津市農業委員会役員４人
担　　当	産業建設福祉委員会７人

【主な意見・要望･提言等】

≪テーマ≫

〇持続可能な農業の確立に向けて

　農業従事者の高齢化と後継者不足に加え、鳥獣被害や農業生産物価格の低迷などにより耕作放棄地も増え、非常に厳しい状況にある。

　農業が次世代へ引き継がれるよう、経営の安定化や担い手の育成のほか、地域農業の各課題の解決に向けた効果的な取り組みの調査研究を行う。

≪意見交換など≫

　日頃から感じておられる農業振興施策について

・今は、農業政策の大転換期にあるという認識を持って、地域で話し合いを行い、地域計画づくりを進めている。市全体で、約７割程度の地域で取り組みが進んでいると考えている。

・宮津市は小規模農業経営が多く、水稲では、ほ場も小さく自己完結型農家が多い。半農半年金で何とか農地を守っている。

・地域計画は２年間で作成しなければならず、現在は農地の不作付け等の現況地図化に取り組んでおり、「将来どのような状態になるのか」、「どのようにしていくことが次世代につなげていけるのか」等の話し合いを行っていこうとしている。

・話し合いには、自治会長も参加いただく中で、日ケ谷地区の「１５日会」や吉津地区の「農業お助け隊」、日置地区の「農地管理協議会」といった地域活動につながっている。

・地域計画づくりについては、宮津市は京都府でもトップクラスで、府外からの視察や講師として招かれている。

・経済的に安定した農業でないと担い手は育たない。宮津市内だけで売っていても、お客の取り合いになる。小規模であっても、市の外にどうやって売っていくかの対策が必要。

・話し合いの中では、高齢者には否定的な意見があり、若い人が育たないといった一面がある。何事も受け入れる気持ちが大切であり、聴く耳を持つことへの誘導が必要と感じる。

・宮津のどこかで「強化地区」を設定し、農地・住宅も含めて新規就農者に提供できるようなことが考えられないか。そういった後押しを願いたい。

・若い人（新規就農者）などには、良い農地を提供してあげたい。

・地域計画づくりは、即、農業者の利益にはつながらないと思うが、次の準備として、いつでも耕作できるようにしておくことが重要と考えている。

・有機・無農薬栽培で「安全な農作物」を生産していくことは意義があるが、今までなぜ、宮津市は有機農業が進まなかったのか。

・規格外が多くできる。機械を入れなければならない。販売先が確保できない。採算が取れないなどが考えられる。
・高齢の方々は、経験農業を踏襲していて、化学的な分析は拒否反応を示す。何年も経験のみで農業していると、なかなか独自の手法を変えることができない。
・有機農業の営農指導する人がいない。
・生物の多様性をどう守り、次の世代へどう引き継ぐかも、今、考えなければならない。
・「大規模法人などを呼べば良い」との考えもあるが、地元との合意を取りながら、互いのすれ違いが起きないよう注意する必要がある。
・府や市に専門の担当者を配置して、有害鳥獣被害対策に力を入れてほしい。農林水産課の職員が少ない現状から増強を望む。サル対策もしっかり行う必要がある。
・観光客によくわかるよう、高速道路を降りた辺りに、印象強くアピールができる「のぼり」等が立てられないか。
・農業委員会委員の報酬を上げていただきたい。会議の他に毎月 10 日間の活動を求められ作業日報を提出しており、活動に見合う報酬であるべき。議員からもプッシュをお願いしたい。

≪まとめ≫
・現在農業委員会で取り組んでいる「地域計画づくり」は、直ちに効果が表れるものではないが、集落で話し合い・人とのかかわりをもって、次の世代へ引き継ぐため、いつでも耕作ができるように準備し、農業・農地を守ることに意義がある。この取り組みは、当市は先進地であることの報告があり、今後も農業委員の活躍に期待したい。
・宮津市は小規模農業経営が多く、水稲栽培はほ場の面積が小さく、自己完結型農家が多い。半農半年金で何とか農地を守っている。このことは、今後の宮津市農業を考えるとき、切り離せない問題であると感じた。
・広がりを見せる有機農業が宮津市で進まなかったのは、高齢の方々は、経験農業を踏襲していて、なかなか独自の手法を変えられなかったこと。また、規格外の生産物が多くでき採算が取れない。販売先の確保が難しい。また、肝心の営農指導する人がいないことなどが挙げられる。しかし、有機農業をやってみたいと思う若者が多いと伺い、「環境にやさしい農業」の可能性も感じた。
・有害鳥獣対策や宮津に即した就農支援、農業委員の活動支援など、諸課題に対応する行政の後押しや体制強化の必要性を感じた。

市民と議会の懇談会の概要を報告します。

令和６年３月 27 日

宮津市議会議長　長 本　義 浩　様

産業建設福祉委員会　委員長　河 原　末 彦